

本と社会



●発行元 人文ネットワーク ●印刷 神谷印刷(株) ●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住) 〒169-0051 新宿区西早稲田3-16-28 Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832 ✉ jinbun-net@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性だけに陥る本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニュースレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介させて頂くものです。

大学の蜂起が 世界を編み直す

夕暮れには人文書をひらいて

白石嘉治

高学歴ワーキングプア

——水月昭道『高学歴ワーキングプア 「フリーター生産工場」としての大学院』(光文社新書 2007)が話題となっています。

90年代以降、大学院の増員と新設によって、大学は少子化にともなう収入の減少を補う。その結果、大学院を修了しても「フリーター」にしかねない大量の「高学歴ワーキングプア」が産み出された——こうした水月さんの分析は妥当なものでしょう。

ただそこで回避されているのは、授業料や日本学生支援機構の「奨学金」の問題です。「奨学金」と括弧をつけたのは、それがローンであり、奨学金の体をなしていないからです。奨学金は仏語で bourse、英語なら grant ないし scholarship ですが、給付であって断じてローンではない。『増補 ネオリベ現代生活批判序説』(新評論 2008)でも述べたように、大学の授業料は無償で奨学金は給付が国際的な常識です。

——2006年には、国連人権委員会による学費無償化への勧告もありました。

でも政府はいまだに勧告に回答していない。それどころか日本学生支援機構は、逆切れしたようなポスターをつくり、そこで「『借りたものを返す』のは社会の基本ルール」と恫喝し「奨学生としての責任」をはたせという。でも、奨学金は給付というのが世界の「基本ルール」でしょうし(笑)、そうした本来の意味の奨学金によって「学生」を「支援」という、機構自身の「責任」はどこにいったのか? 学生を借金漬けにすれば、われわれが幸福になるとでも思っているのでしょうか?

大学の霊性、夕暮れの人文書

——ただ現実には、とりわけ人文系の大学院生の多くは数百万円の奨学金＝ローンをかかえ将来の見通しもない。そこに大学や人文書の困難が集約されているように思えるのですが…。

佐々木中『夜戦と永遠 フーコー・ラカン・ルジャンドル』(以文社 2008)には、後期フーコーについてのすばらしい記述があります。フーコーは79年のコレージュ・ド・フランスの授業『生政治の誕生』(慎成康之訳 筑摩書房 2008)で、台頭しつつあった新自由主義の分析をする。これ自体、いまでも完全に通用するものですが、さらにフーコーは当時のイラン革命に新自由主義にたいする最初の「蜂起」をみてとる。そこには「政治的霊性」があった、と。この「霊性」こそ、いまの大学に問われているのだと思います。

——「霊性」ですか?

そう、spiritualité。フーコーによれば、それは「主体が真理に到達するために必要な変形を自身に加えるような探求、実践、経験」と定義されます。

大学が真理との関係をもつことは疑いえない。そこには真理の認識のみならず、真理への実践をもふくむはずですが。フーコーにとって、その実践は「自己への配慮」であると同時に、なにより「霊性」をはらむ「蜂起」だった。

じっさい20世紀は、ドレフュス事件という無名の大学人たちの集団的な蜂起とともににはじ

まります。それは今日でもかわらない。今年の韓国のゼネストは大学に先導されたものでしたし、イタリアでも大学が中心となって、ネオリベラルな改革にたいする教育機関全般におよぶストライキがありました。

しかも、先進諸国では大学への進学率は5割をこえつつある。フランス革命のときに、フランス語を話す住民は5割ほどでした。それが近代国家の母体＝ネーションとなる。そのネーションが大学にとってかわられようとしている。だからこそ国家や資本は、授業料を課し学生を借金漬けにすることで大学の営みを馴致しようとする。しかし、繰り返しますが、大学には真理への実践という霊性がやどるのであり、国家や資本の金銭による検閲に回収されるはずもない。むしろ大学の蜂起をつうじて、新しく世界が編み直されていく。この運動に身をゆだねるべきでしょう。そのために夕暮れには、人文書をひらいて喫茶店でぼんやりと外をながめていたい。きっと大学の霊性の燦火がともるはずですから。

しらいし よしはる 1961年生まれ。上智大学他非常勤講師。『VOL』編集委員。フランス文学。大野との共編者『増補 ネオリベ現代生活批判序説』(新評論)、訳書『啓蒙のユートピア I』(野沢協監訳 法政大学出版局)、M.クレボン『文明の衝突という欺瞞』(編訳 新評論)他。光文社新書より大学論が近刊。



人文ネットワーク7年の意味

■ 大野英士 (埼玉大学他教員/文学)

人文ネットワークは、人文書取次店の最大手、鈴木書店の倒産と、その背景にあった人文書販売の不振に危機感をもった数人の有志が、上欄趣意文を掲げて2002年1月に発足した会である。我々の歩みは、折しも小泉構造改革の進行と重なった。貧困と新たな「階級」格差が顕在化し、教養教育の一つの保塁であった国立大学があっけなく法人化される中、我々の生存とそれを支える「教養」の根拠を揺るがす主敵として立ち向かわなければならないのは、ネオリベリズムという野蛮な資本主義ではないのか。同人に共有されてきたこうした問いへの一つの答えは2005年に刊行された『ネオリベ現代生活批判序説』である。このささやかな書物は、その後、同じような問題を共有する多数の著作や運動と連動することで、期せずして「ネオリベ」の問題点を社会に知らしめる起爆剤の役割を果たした。ネオリベの崩壊が誰の目にも明らかになりつつある現在、まだ、ネオリベ脳へと洗脳された多くの人々は、ほとんど機械的にネオリベ的な発想を紡ぎ続けている。状況に敵対する「勇気」を忘れず、一冊の本、一行のテキストにこだわることから始めよう。それが、ネオリベに対する一番確実な抵抗であることを信じて…



明日の大学と人文学

8月9-10日、鎌倉・由比ヶ浜で行われた恒例の夏合宿(66回例会)には、当会メンバー10名の他、ゲストとして西山雄二(東大グローバルCOE=UTCP)、谷口清彦(パリ第4大学)、右崎有希(パリ第3大学)、伊藤文人(日本福祉大教員)の各氏が参加、また9月27日、早稲田大学8号館501会議室で行われた67回例会には、当会メンバー12名が参加し、2回に亘り「大学と人文」について活発な討論が行われた。(編集=大野)

大学を取り巻く状況全体を視野に

大野 ネオリベによる大学解体=人文学と大学の危機が進行する中で、個々の大学の生き残りのための改革を語るより、大学を取り巻く状況全体を視野にいたれた運動の構築が必要です。

白石 本来大学はリベラリズムの場でなく、言論と生活が一体となったサンディカリズム=コミュニン(組合)の場です。サンディカ(組合)への回帰、つまり今日の若者たちの中で急速に広まる労働運動には、実は本来の大学的なものへの回帰があるのではないかと思います。

生江 私の勤める日本福祉大は、かつての「過激派左翼」の顔を捨て、「あたりまえの大学」に変わりましたとアピールして、社会福祉士の資格試験対応講座とかを開いています。でも、学生はバカじゃない。いろいろなことを考えている。それなのに人前では「考えない」「語らない」ように馴致され、去勢されている。

伊藤 私も日福大で社会福祉原論を教えています。学生によると他の授業はすべてドリル形式で「考えずに覚える」ことのみを教えている。みんな思想やイデオロギーについて知り

たがっていますが、自分の考えを言うてはいけないと感じている。私の授業を受けて、「文章を読んで考えるのは初めてで、専門書をもっと読んでみたい」という学生も多い。学力低下、下流大学などという議論があるが、果たしてそうか。仮にそうだとすると、7割ぐらいは大学や教員の責任ではないか?

西山 生涯大学に籍を持たなかったデリダは、研究教育機関「国際哲学コレージュ」を立ち上げた。そこでの催事は無料で、学問をしたい全ての人に開かれています。大学は「サンディカ」、つまり「生活の実感を伴ったベタなもの」と「学問」とを共に考える場でなければならない。先日訪問した韓国のコミュニン「研究空間(スユ+ノモ)」は、まさにこれを実践しています。(スユ+ノモ)では、生活と切り離された学問はあり得ないとされていて、メンバーはみな「研究が大好き、だから一生やりたい、そのために生活と研究の両方を考えていく」と語っていました。現実には大学と社会が一体化し、「人材」育成のために大学は必要だという議論になっていますが、それでもその「縁」や「周辺」「余白」の部分で何か興味深い研究活動ができないかと考えています。

大学人よ、「恐怖」を克服する「勇気」を持って

岡山 「知識人」とは、もともとモーリス・パレスがドレフュス派を指して用いた言葉で、「無名の、群れる連中」という意味の蔑称でした。それは個人レベルで言説を行うサルトルのよ

うな「総合的知識人」を超える地平をもっています。その伝統はむしろフランスのアレゼールや韓国の(スユ+ノモ)のような「集団的知識人」に残っていて、「無名の知識人の群れ」が形づくる共同体、白石さんや西山さんのいうサンディカにつながります。ところで、アラン・バディウはフランスの現大統領サルコジの政策を「恐怖の民主主義」と呼んで批判しました。そしてそれを乗り越えるにはレジスタンスの「勇気」が必要だといいました。またドレフュス派やレジスタンスの運動は、少数の人々に担われていましたが、同時に国外のネットワークに支えられていたということがあります。デリダのいう「条件なき大学」を実現するにも、勇気と国際的な連帯が必要なのだと思います。

谷口 今、我々院生は「外からの院生評価」にさらされていますが、それは「エリートにならないければだめ」という「恐怖心」をあおることです。「おまえもエリートになりたいんだろ」といった目線にはもう飽き飽きした。むしろ自分の愚鈍な部分を信じることで、そこから立ち上がる学問を追求していきたい。

右崎 私も院生としてそう感じます。上の方に行くにしたがって「空気読め」みたいなプレッシャーが高まる。「恐怖」はそういうものに対して生じるんだと思う。



騙しに弱い、パブプロ化する社会

≪ 生江 明 (日本福祉大学教員/社会開発) ≫

現在の大学では、「私の答え」を語らず、学生に「正解」を授けるだけの教員が多い。「えー、判りません!」「駄目だなー、覚えておきなさい!」——「正解」を「知っている」教員と、それを素直にノートに取る学生たち。…これでいいの?/教授会では「次のことが改革委員会で決定されました」との報告に、黙ってうなずく教員たち。…審議機関は決定機関なの?/これが私たちの日常の姿だ。

リキッド・ソサイエティ=個人化社会(Z. パウマン『個人化する社会』青弓社 2008)の中で起きていることは何だろうか。ひっそりと発言をやめたかのような大学内で、声高に技術向上のカリキュラムが進行する。高く売れる商品(=学生)を製造するためのメニューが示され、知識投入量と資格試験合格率のアップが成果として求められる。生産力の向上、コミュニケーションスキル=社会力の向上、現場力の向上などなど。

もっともらしいキーワードに素直に従う人々。「答え」はすべて正しく、「委員会」はフォーマル、「〇〇力」は身につけるもの。疑うことをやめパブプロ化する社会。刺激への反応のみを強いられ、考えることを奪われる。その向こう側で高笑いする者たちがいる。「あっ、俺だけ、すぐお金を振り込んで!」

一本の葦のための一冊の本

≪ 岡山 茂 (早稲田大学教員/文学) ≫

ブルデューによれば、世界を一つのスペクタクルあるいは表象とみなすことは、自分が世界のなかに存在しているということへの無知あるいは忘却を示すものでしかない。彼にとって「実践感覚」とは、世界のなかにいながら世界を変えてゆく知性であって、スコレー(考えるための余暇=学校)のなかに身を引いて世界を外から眺めることではなかった。一方マルメは、「すべては世界において一冊の本に到達するために存在する」と言っている。世界と関わるためには、一冊の本を「自分のための劇場」として持ち歩き、そのなかに入り込みさえすればよい。するとそこに日没の地平線が広がる。あるいは、「人間は一本の葦にすぎない」と言ったパスカルは、自らが「考える葦」であったことを証明するかのようになり、のちに『パンセ』にまとめられる草稿を残して死んだ。ブルデューはその一冊を手にしながら、スペクタクルと化した世界を外から眺める方法を見出している。その『パスカルの瞑想』(Seuil 1997)は、マルクスやコントやデュルケムよりも、「科学と宗教を乗り越える知」を発見した17世紀の天才と、この知をポエジーとして実現しようとした19世紀の詩人に近い。新たな人文学の可能性もそこにありはしないか。

学住接近

≪ 入江公康 (文政大学他教員/社会学) ≫

今夏、依頼された集中講義のため東京を離れ、四日間、出講先の大学敷地内のゲストハウスに宿泊する機会をもった。学生時代は電車通学だったし、現在講義に向かう際も同様である。いわば「学住分離」が当たり前だったので、歩けばすぐ講義に出られるというのは初の経験であり新鮮だった。大学に住むこと、少なくとも生活圏のうちに大学があること。都会の大学は郊外に移り、学生街も消えつつあり、そのような学と住の分離が当たり前のごとく。教員と学生たちが一所に住む、ひとつの住の構想としての大学というのを考えてみる。大学では学寮、自治ともに潰されたりしているのだが、学生の要求に「学住接近」はないかと探してみた。山中明『戦後学生運動史』(青木新書 1961)。どうもそのような要求があったとは見当たらない。大学をめぐるのは正直な話ばかりで、つぎつぎ学費値上げ、奨学金返還、高層ビルみたいな校舎、低級エセ学者の蔓延、非常勤教員の解雇、妙な権威主義、マネーゲームへの狂奔、アカハラ、矮小な学内政治……。

一体いつまでこんなことを続けるのか、まともに研究なり知的探求なりができるのはいつなのか。そんな中、散歩しながら向かう講義とともに「学住接近」に想いを馳せた。

[楽園から吹いてくる]強風は天使を、かれが背を向けている未来の方へ、不可抗的に運んでゆく。…
ぼくらが進歩と呼ぶものは(この)強風なのだ。——— ヴァルター・ベンヤミン

(今村仁司『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』より)



座談会の模様 (2008.9.27)

ナニボウ ジョニー・サンダースはボブ・ディランの「Like A Rolling Stone」をカバーしてるんだけど、オリジナルには無い「誰か俺に教えてくれ」っていうフレーズを入れて歌った。そういうのが、本来大学が持たねばならない愚鈍さなんだと思います。

永田 フーコー晩年の傑作「啓蒙とは何か」に「態度」という概念が出てきますが、これは私にとっては「勇氣」ということです。「勇氣」とは実はとても具体的なことではないのか。権力に照らされながらも「勇氣」によって立っているのが本来の大学なのですから。

吉田 大学の問題とは、つきつめると、その外部にいる私達市民一般の問題だと思います。私達の側に「大学とは」「知識人とは」という視点がないからこそ、社会の中で「大学」というものが見えにくくなっている。

自由な言説を育てる「空間」を確保するために

片桐 「学生はバカじゃない、考えている」というが、一教員としては、そういう学生の割合が最近確実に減りつつあるという感触があります。私自身の中にある「ものを考えることの欲望」それ自体が学生達には受け入れられていないような危機感があります。

生江 僕は、学生同士が議論する場を作るような授業を行っています。議論することで公共空間をつくりだす経験を持ってもらうためです。でかい付箋紙を使って、ある問題について自由に意見を書かせ、黒板にどンドン貼ってもら

う。そうすると、自分と他者の考えの共通点や異なった点、自分自身の中にある論理矛盾などが明らかになって、そこから初めて自分自身で考えることの重要性に目覚めていく。学内で、自主講座を開いたり、ただ単に鍋を食べる会を組織したり、名古屋の商店街と一緒に「勝手に市民講座」といったイベントなどもしています。いわば広場としての大学です。当然、学内の警備などにはいやがられている(笑)。

一方、大学の教授会などでは誰もしゃべろうとしません。かつての自由な大学の雰囲気は影も形もない。去勢された大学、学問の自由や大学の自治を奪われたこのような空間で本当の自由な言説が育つでしょうか。大学の現状をみると、日本の社会はすでに危ない限界を超えている気がします。

石黒 大学の外側にいる私自身の関心としては、国民生活の現状を憂えている政党が教育の問題をどう考えているのかということです。また、大学や人文学の置かれた状況を私達は政策実行者達にどう伝えていけばいいのか考える必要もあると思います。

入江 新古典派経済学のベッカーは、教育を「人的資本に対する投資」と考えますが、これは「回収可能」の原理にもとづく。こんなばかげた理論はない。最近、日本学生支援機構が奨学金の取り立てを強化すると報道があった。学生たちはすごい借金を背負って社会へ出て、しかも非正規職しかなく「返す」あてもないわけです。じつはサブプライムと同じ構

造です。

新自由主義は終焉に向かっているが、今後を考えるには、世界恐慌、昭和恐慌に突入した後の民政党あたりを重ねてみていい。同党はネオリベ構造改革であり、一方で社会改良主義的性格も持ちあわせた。最終的には挙国一致内閣をへて大政翼賛会へと流れ込み、また永井柳太郎などが大日本育英会を設立したことも示唆的。こちらとしてはたとえば、学問と生存=生活の〈共〉の場をつくる「学住接近」構想をもって構えるくらい考えていいかもしれない。

生江 「空間」というのは異物の乱入によって変になる。ゆがむ。永田さんが早大生協でやっている「大学の夜」のような異物が入ってこない空間は硬化化する。白石さんが中心になってやっている「奨学金を返さない」などの運動は、社会のルールの「向こう側」を楽しく作っていく、ということだと思う。それをやっていると、ある日気づけば居場所がなくなってしまうという事態になるんじゃないかと。

『ネオリベ現代生活批判序説』の次の章、あるいはとぼして最終章をみんな書いていくことの必要を感じます。

大学は教育の名では語れない

谷口清彦 (バリ第4大学/文学)

外国語を覚えることは楽しい。その目的は単純である。話し、聞き、書けるようになること。外国語を学ぶことは専門的な知識の追求などではない。それはむしろ生と欲望にもとづいている。大学という自律的な運動は、そうした外国語の習得を範例としても考えられるだろう。

19世紀初頭、文学教師ジョゼフ・ジャコトが「学校」の論理をしりぞけるとともにいわば「大学」の論理を発見したのはまさしく語学の経験をつうじてである(ランシエール『無知なる教師』Fayard 1987)。教師・学生ともにたがいの言語を解さないという状況のなか、学生たちはただ『テレマック』の原文と翻訳を読み比べ、フランス語をほぼ習得してしまう。問題は教育学ではない。重要なのは、知識の伝達という位階的な学校の論理をこえて自律的な語学的知性がしめされたという点である。大学という運動は、贈与・負債という教育の枠組みでは考えられないそうした自律性にもとづく。

ラッツアラートによれば「社会的権利をともなわない文化は存在しない」。アンテルミタンとともに、いま世界の大学生が取りかかっているのは、ポルトゥンスキー等がいう「社会批判」と「美的批判」のネオリベラルな分離をこえたアノマルな運動である。大学とは無償の権利である。

大学、集合的逸楽について

永田 淳 (早稲田大学生協コーププラザブックセンター)

学ぶ者と教える者の組合——始まりの「大学」を想起(アナムネーシス、再生)するとき、そこに共同の生活が含まれたことが思い起される。学問とは共感に、時空間を超えた共同に支えられた営みであり、「大学」はその始まりから一貫して集合的な運動であった。そしてその共同性に賭けられた何かを想わないわけにはいかない。

シャルル・フーリエがファランステールと呼ばれる、生産・消費・生活の共同体あるいは住居を構想する際、そのイメージを求めたのはパレ＝ロワイヤル(王宮)だった。19世紀当時のパレ＝ロワイヤルは、大革命前から家主フィリップ平等公により民衆に開放され、回廊には商店が立ち並び、娼婦と革命家がたむろする不穏にしてバリ・モードの中心であったことに注目しよう。シモヌ・ドゥブー『フーリエのユートピア』(平凡社 1993)が明らかにするように、ファランステールとは、人々の情動が完全に発揮される共同体なのであって、情動を道徳で制限する組織ではない。フーリエにとって共同性とは集合的逸楽を追求することなのである。

「大学」が学問という共同において掲げつづける無条件性とは、集合的逸楽そのことだろう。それをすべての人々に掲げ大きくしようとする運動が「大学」なのである。「大学」は幻視するのだ。到来しつつある都市を、共同体を。

私と大学

ナニボウ (ミュージシャン)

90年代も、あらゆるジャンル奏者には、ジャンル音楽に内包されたアイデンティティによって、音楽を創造することが困難であった。また、そのことから、今までのジャンル音楽は死んだと言って、新たに音楽を創造し直す者も現れたが、新たなジャンルとして回収する解釈に没われていた。そんな時期にジョン・フェイヒーの「Juana」に出会った。このギターによる即興演奏(独奏)で彼は、自らの演奏に耳を傾けながら弾き、弾きながら/聞きながら、演奏をした。私には「私」らしき存在の中心に、聞く主体と弾く主体を向き合わせることで、ジャンル音楽から「私」を切り離し、「私」の音楽の創造に挑戦しているように聴こえた。彼の閉じ方を見習って当時の私は、この方法が唯一の音楽の創造と思っていたのだが、今になって思えば、私にも「私」の生成の可能性を予感させてくれたというところだろう。最近読んだ『インプロヴィゼーション』(工作舎 1981)の著者デレク・ベイリーは、音楽の創造に関わるフリー・インプロヴィゼーションの実践一般を指して「定型のない形成への傾向」と言った。これは、その実践に関係するもの、それぞれの「私」の絶えざる生成過程を意味する。ここで私は、その傾向が可能な場や状況を指して「大学」と言いたいのだが、この「大学」は、それぞれの「私」が未だ訪れたことのない音楽の可能性を秘めてはいはしないだろうか。

人文科学の危機は、逆説的にも、人文科学の過剰さとともに進行するのではないだろうか。

他の学問分野と比べて、人文科学は、収益性、効率性、卓越性といった社会・経済的な論理からは自律しており、またそうすべきだとみなされてきた。だが、現在の状況からすればそれは過去の話だ。人文科学はその生存を賭けて過剰なまでに社会・経済的な論理に訴え、その有用性を声高に主張し、その根拠を無制限に変革させなければならない。人文学はそもそも在野の職業と関係が深く、作家、ジャーナリスト、批評家、映画作家、美術家など社会と密接な関係をもっている。多様化する社会のニーズに応じて、人文学はその都度その制度や内実を変容させつつ、価値を生み出すことができるだろう。人文科学は大学制度の枠の外で自らの存在理由を探求するのだが、しかし、こうした過剰な冒険は地道な研究活動を危険に晒し、研究者の育成をなおざりにさせてもいる。

「学際性」という新たなドグマ

情報資本主義、ポスト産業主義、非物質的労働などその呼称がいくつものものであれ、先進国では財やサービス以上に知識や情報が高度資本主義の動力因の一つになっている。高等研究教育機関はそうした発展の主たる役割を担う。現在の資本主義において、価値の多様化が多様な商品を生み出すのに応じて、人文科学のスタイル

もまた多様化し学際化し複雑化する。実際、哲学や文学といった古名の上に、「比較文学」「地域研究」「カルチュラル・スタディーズ」といった新しいラベルが徐々に貼られてきた。これらの呼称がすべてアメリカで誕生したことは興味深い。「比較文学」は、とりわけ第二次世界大戦中に亡命したヨーロッパ各国の知識人によって形成された。「地域研究」は冷戦の影響下で、従来の学科を越えた「地域」概念に基づく公的な研究プログラムとして創出された。「カルスタ」や「ポスト・コロニアル研究」は1960年代にアジア系移民が増加した結果、誕生した新領域である。こうした学際性の創出は、しかし、グローバル資本主義と相即するその新たなドグマとして機能してはいないだろうか。

苦しみを喜びへと変える

自然を研究対象とする自然科学は諸事象の法則性を解明しようと普遍的なものへの志向性を有する。他方で、人為的構築物を研究対象とする社会科学は政治・経済・文化のグローバル化を受けて、より包括的な理論構築を強いられている。これに対して、人文科学は人間の精神的活動を自己内省的に考察する学問分野である。人文科学においては、自然の普遍性と政治経済のグローバル化の狭間で人間性を探求することが課題となるのである。しかも、人文学においては、差異に敏感であることが要求される。言説の発話主体が

男なのか女なのか。西洋人なのか非西洋人なのか。そして、男とは誰か、女とは誰か。西洋人とは誰か、非西洋人とは誰か。人間が真理を発見するために、さまざまなコンテクストを読み解く技法が人文学では要請されるのである。サイドが晩年に主張したように、人文学の使命は人間の人間による人間のための読解の可能性にあるのであり、この点で、人文学は世俗的で民主的で絶対的に開かれた力をもつ。

大学、とりわけ人文学においては、人間の精神活動の可能性をめぐって真なるものの探究がおこなわれる。人間という存在が絶対的な解をもたない以上、重要なことは人間の本性を無条件的に問い直し続けることである。人文学は、ときに巨視的な視野から、ときに微細な視点から、人々が日常生活において直面するさまざまな疑問や問題に誠実に応答し、問題を完全に解決するまでには言わぬまでも、問いの所在を構造的に解明し展望を開くことで、人々の夢と希望を育む。真なるものの無条件的な探究に従事する人文学は、それゆえ、いかに困難な時代にあっても、人々の苦しみを喜びへと変える力を失うことはない。人間が内面的な仕方での人間の営みを無条件的に探究することは、人間が人間を信じる力を絶やさないことに他ならない。人文学に対する私たちの信は、いつも、そこに、ある。



文献案内

大学の未来と人文学を共に考えるために..... 白石嘉治

- **ビル・レディングス『廃墟のなかの大学』**(青木健・斎藤信平訳 法政大学出版局 2000) 80年代から90年代にかけての英米系の大学の変容を追え。大学の基盤が「教養」から「卓越(エクセレンス)」となり、恣意的な尺度による競争が蔓延するロジックを解明する。
- **ジャック・デリダ『条件なき大学』**(西山雄二訳 月曜社 2008) 「脱構築」で知られる哲学者の晩年の「信仰告白」の書。大学とは何か? 「明日の人文学」とはいかなる行為なのか? デリダの大学への「信」に揺さぶられない者はいないはずである。訳者による付論「ジャック・デリダと教育」も必読。
- **クリストフ・ヤハル『知識人の誕生 1880-1900』**(白鳥義彦訳 藤原書店 2006) 1894年のドレフス事件を機に「知識人」は「誕生」する。もともと知識人とは、たとえ無名であっても群れつつ国家に抗する大学人たちだった。この歴史的な認識は現在も手放すべきではないはずである。岡山茂・谷口清彦訳による『大学の歴史』(J. ヴェルジェとの共著 クセジュ文庫)の近刊も予定されている。

- **アラン・ド・リベラ『中世知識人の肖像』**(阿部一智・永野潤訳 新評論 1994) 知識人と人文学の刷新を深く印象づけたフーコーの系譜につらなる中世哲学史家による。とりわけ人文学の起源が体系的な神学との決別であり、そこから大学がはじまるという指摘は白眉である。
- **『歩きながら問う 研究空間(スノウノモ)の実践』**(金友子編訳 インパクト出版会 2008) 韓国の大学への進学率は8割に達する。困難の深さも予見的である。だが、人文学の共同性のタフで明らかな営為はつづく。「明日の人文学」の輝かしい実験の軌跡と展望が語られる。
- **『現代思想 特集 = 大学の困難』**(2008年9月号) 『現代思想』は大学と人文学について持続的な思考を積み上げてきた唯一の雑誌である。本特集はその現在における到達点をしめす。語られるのは「困難」ばかりではない。岡山茂「大学改革の日仏比較と学長たちの惑星的思考」、西山雄二「大学の名において私たちは何を信じることを許されているのか ジャック・デリダの大学論における信と場の問いから」、永田淳「今夜、講義がある 連続講義『大学の夜』という実験」、白石嘉治「院生サンディカリズムのために」ほか収録。

状況雑感

大学現場の人文センス ■ 桑田 禮彰(駒澤大学教員/現代思想)

人文学とは本来、大学教育において「専門」学部(人文学部ないし文学部等)を構成するよりむしろ「教養」教育の理念を与えるものであり、なるほど専門の「基礎」であるにしても、それは専門への閉じこもり方の初歩ではなく、全く逆に専門の閉鎖性の危険を教える。したがって人文学は開放的で総合的である。ただしその総合は、諸「専門領域」を網羅するという意味でのそれ(領域的総合)である前に、知を取り巻く生活・倫理・美などの「問題」を網羅する(問題的综合)とともに感性・想像力などの能力を総動員して知性を補い柔軟にするという意味でのそれ(方法的総合)である。

要するに人文学とは、取り組むべき問題の狭さからも知性能力の自閉性からも解放され、自らの内なる感性の声に耳を傾け想像力の問題提起を受け止めながら生活・倫理・美などの広範な問題に取り組む柔軟かつ毅然とした自由な知性の学問である。

大学の現場において、この人文学の理念は大学人(教員・職員・学生)の「人文センス」とでも言うべきものになり、授業・会議・事務などあらゆる場面を貫き、硬直した大学知性——効率性・実用性・利便性等の支配的な功利主義的価値に隷属しイデオロギー化し閉鎖的になった大学知性——を批判し、その背後の時代のイデオロギーとしての「功利主義」の非効率性を明らかにして、本来の効率を実現しなければならぬ。現在の金融危機でも露呈しているように、自由放任経済・危機管理政治という資本主義体制は、生来の利那主義・投機主義による視野狭窄のせいで、経済規模拡大に比例して巨大化する損害を社会にほぼ不可避免的に与え続け、その「功利主義」は非効率性を拡大再生産する。いま例えば資産運用にのめり込み株暴落で破綻することから、少なくとも大学を守ってくれるものはこのセンスしかない。

編集後記『ル・モンド・ディプロマティック』の最新号でセルジュ・アリミは新自由主義が猛威を極めたこの間、対抗勢力があまりに臆病な要求しか掲げてこなかったことに憤慨している。トービン税、最低賃金の増額、「新プレトンウッズ体制」…。ハイエク等、新自由主義者はケインズ体制が続いていた数十年、当時は「不可能」と考えられた要求を掲げ続け、「危機」の到来と共にそれを強引に押しつけることに成功したのに比し、余りに消極的だというのが▶日本の大学の現状は限りなく絶望的だ。日本の大学は、構造的に余りに「私立」の比率が高く、学生に世界一高い学費を押しつける一方、彼らを「奨学金」という名のローンで借金漬けにし、「非常勤講師」という名の非正規雇用教員を搾取することで、単体としての「生き残り」をはかっている▶「営利」企業集団なのだ。そこから金融先物商品に投資して巨額の損失を被るなどというあり得ぬ事態も生まれる▶しかし、この「危機」的で「絶望的」な状況のなかでこそ、大学の「不可能な」理想を「無条件」に訴え続けなければならない。すべての高等教育の無償化を。学生に生活費給付を。大学がその成員に無前提に学問研究を保障する場となることを… (大野)